カラーアニメーション映画

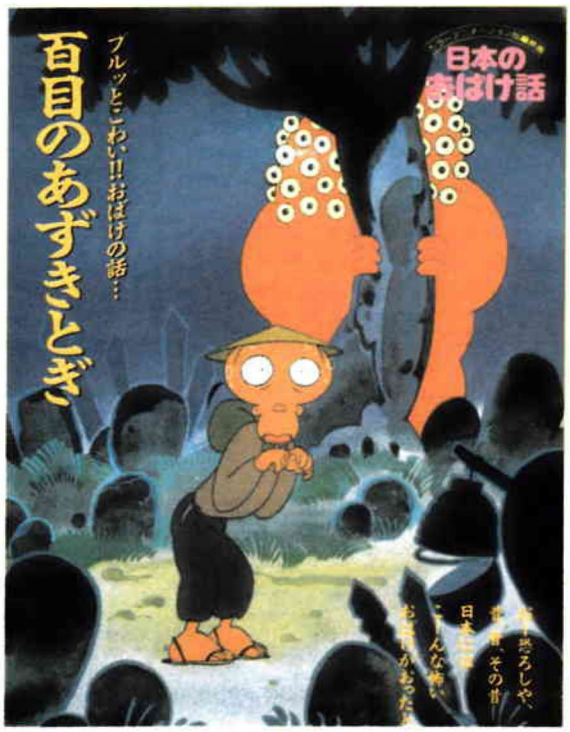
日本のおばけ話

シリーズ!!

原作…木暮正夫・原ゆたか
（岩崎書店刊）

- ●きもだめしのばん
- ●のっぺらぼう
- ●百目のあずきとぎ
- ●絵からとびだしたねこ

カラーアニメーション　各１５分
ＤＶＤ（ライブラリー用）
各￥６０，０００+（税）



北辰映像株式会社
〒350-0461埼玉県入間郡毛呂山町中央3-32-3
TEL:049-298-5792　FAX：049-298-5793
E-mail: co@hokushineizo.com

せすじゾクゾク　ようかい話…

上映時間15分

きもだめしのばん

●ものがたり

ある冬も近い夜のことです。
村の若者たちが茂吉の家にあつまって、わら仕事をしていました。
わらぞうりやわらぐつを作るのです。ただ仕事をしているだけでは、たいくつになってきたので、弥助が　おもしろいことを、おもいつきました。
「これから、みんなでキモだめしをするべ」
裏山のお墓の大きな松の木の上で、ひとばんすごそうというのです。
みんな、すぐに賛成しましたが、いざ、いこう。と、なると、怖くなったのか、誰も自分が先に行こうとはいいません。
すると、茂吉がいいました。
「誰も行かねえなら、オラが最初に行くだ」
それを聞いていた茂吉の母は、とんでもないことだと止めましたが、茂吉はどうしても行くのだといいはりました。しかたがないので母は茂吉に縄とカマを渡し、キモだめしに行かせることにしたのです。
外はもう、真っ暗で、少し心細くなってきましたが、みんなにいったてまえ、もうもどることは出来ません。
それでもなんとか裏山のお墓を、おそる、おそる、ぬけて、大きな松の木の上に登りました。
すると、まもなくして、家でわら仕事をしているはずのゴンが木の下にやってきて、茂吉を呼びました。

ブルッとこわい　おばけの話…

上映時間15分

絵からとびだしたねこ

●ものがたり

むかし、あるお寺に、らくがき好きの小坊主さんがいました。
小坊主さんは何よりも、ねこの絵を描くのが大好きで、そうじをしていても、勉強をしていても、ついついねこの絵を描いてしまいます。
いくら、おしょうさんが注意してもらくがきをやめないので、とうとう小坊主さんは、お寺を追い出されてしまいました。
小坊主さんは、ねこの絵をだいじにかかえて旅に出ました。
ひとり旅は気らくなものです。
好きなところで、好きなだけ、好きなねこの絵が描けます。
でも、ひとりの夜は、ちょっと不安です。
その日は、森のはずれの荒れ寺に、とまることにきめました。
何だか不気味な荒れ寺です。
小坊主さんは心細くなってきました。
「そうだ！」
いいアイデアが思いつきました。
どんな時でも、大好きなねこの絵があれば気持ちも落ちつきます。
小坊主さんは、壁いっぱいにねこの絵をはりました。
これで安心してぐっすりねむれます。
ゴト…ゴト…
すっかり寝入ってしまった時です。
天井から、バケモノがおりてきました。

ドキッとこわい　おばけの話…

上映時間15分

のっぺらぼう

●ものがたり

大工の正八は、町はずれのお寺の修理をしていました。　町はずれのお寺の修理をついつい仕事に夢中になってしまい、もう日も暮れそうです。
仕事をおえて縁側でお茶をいただくと、和尚さんが妙なことを言いだしました。
「こよいは満月。帰りはじゅうじゅうお気をつけなされ…」
そんなことを言われると、さすがの正八も、帰り道が心配になってきました。
空には赤い不気味な月が出ています。
たしかに何か、おこりそうな気配がします。
正八は、帰り道を急ぎました。
さびしい道をぬけ、やっと江戸の町の中にたどり着いた時です。
お堀のそばの柳の下に、白い女の人の影がゆれていました。
（ドキッ！）
おばけに違いありません。
正八は、ものかげにかくれてふるえました。
「なんまんだぶつ…なんまんだぶつ…」
こわごわと、もう一度のぞいてみました。
女の人には二本の足がちゃんとついていました。
「なんだ…足があるじゃないか…」
正八は、ホッとひと安心です。
なんだか女の人は深刻な雰囲気で川の方を見ています。
「どうなさった？」
身投げでも考えているのではないかと思い、正八は声をかけてみました。
その声に女の人はゆっくりふり向きました。ところが、赤い月の光に照らされたその顔は、目も鼻も口もない、のっぺらぼうだったのです…。

ブルッとこわい！　おばけの話…

上映時間15分

百目のあずきとぎ

●ものがたり

むかし、むかし、電気のあかりもない昔のことです。
旅人がひとりで山を越えるのは、それは心細いものでした。まして、夜になれば何が飛び出すかわかりません。
旅人は、ちょうちんのあかりをたよりに、おそる、おそる、夜道を歩いていました。
おなかも減ってくるし、山の夜道は不安でいっぱいです。
すると、どこからともなく、
ショキショキ…ショキショキ…
と、あずきをとぐような音が聞こえてきました。
「はて？あずきでも、といどるような音だが…」
旅人は呼びかけてみました。
「おーい！」
すると、あずきをとぐ音は、パタッとやんでしまいました。
「気のせいか？」
旅人は、また歩き出しました。すると、また、ショキショキ…ショキショキ…
と、あずきをとぐ音が聞こえてきます。
「はて？家でもあるんかいな…」
旅人はキョロキョロあたりを見ましたが、家などどこにもありません。
旅人が、ため息をついて、フト下を見ると、そこに、あずきのつぶがちらばっていました。
旅人は不思議に思って、そのあずきに手をのばすと、なんと、そのあずきがピョコンと立ち上って逃げ出しました。